

ジョン・ダンの恋愛詩における宗教性（その一）

船津，和子
九州大学大学院文学研究科：修士課程

<https://doi.org/10.15017/6787717>

出版情報：九大英文学. 37, pp.1-13, 1994-12-19. The Society of English Literature and Linguistics, Kyushu University

バージョン：

権利関係：



ジョン・ダンの恋愛詩における宗教性（その一）

船 津 和 子

序

ジョン・ダンの宗教性の問題は、多くの批評家がその可能性を否定する傾向にある為に一般には消極的価値しかないものとして理解されている。聖職就任の際におけるダンの心情をリーシュマンは次のように要約する。“All other avenues of preferment were apparently closed, and there seemed no cause open to Donne but to take Orders.”¹ 彼はダンの宗教性を一貫して否定する態度を表明しているのである。またクライヴはダンを完全な冷笑家としての解釈を示しながら、彼の聖職への就任事情を以下のように説明している。“...he reluctantly sent in his application to the proper quarter.”² そしてダンの聖職就任は、必ずしも宗教的感情に起因するものではないという立場を主張する。しかし、この分析は必ずしも適切なものとは言えない。この主張の適切さについては、少なくともダンの作品における宗教的要素の実体を観察することが不可欠だと言えよう。即ちリーシュマン、クライヴはダンの伝記的要素に基づいて解釈するというスタンスをとることによって、作品における宗教性を軽視している。だが、宗教性に関する論議において作品における宗教性の問題を見極めることは重要な意義をもつ。初期の作品 *Satyres* (1596) にはダンの精神の内における宗教的問題提起の萌芽を認めることができる。

.....doubt wisely, in strange way
To stand inquiring right, is not to stray;

To sleep, or run wrong is. On a huge hill,
Cragged, and steep, Truth stands, and he that will
Reach her, about must, and about must go;³

賢く疑い、奇妙な道に真理を尋ねて佇むことは道に迷うことではない。眠りや邪に進むことは迷いである。険しい高い丘の上に真理は立っている。真理に到達しようとする者は迂回して行かなければならないとダンは語る。この姿勢にみられる精神構造は彼の内面においていかなる信念を基盤にしどの様な形で形成されていったのであろうか。*Biathanatos* (1608)の序文は、彼の若年時代における心情への一つの手懸りを与えている。

I had my first breeding and conversation with men of a suppressed and afflicted Religion, accustomed to the despite of death, and hungry of an imagin'd Martyrdome.⁴

彼の境遇において、幼少期より死や宗教がいかに大きく作用していたかという事実が認められる。換言すれば、彼の精神において死と宗教という二つの大きな問題が絶えず相互に絡み合う形で内在していたのである。この認識は、宗教性を考察する際に彼自身が描出した死の観念を探究するという一つの方向性を提示してくれる。従って本論では、その死の観念を分析することによって宗教性の問題を検証することにする。

I

ダンの恋愛詩は求愛を題材とした過激奇矯な思想を謳った冷笑的、且つ官能的要素を強く孕むものとして解釈することが今日ではほぼ定着している。しかし、作品の中に多岐にわたって展開される死の描出⁵を省察してみる時、恋愛という世俗的な世界は単なる出発点にすぎず、その根底には本当の意味における到達点である宗教的世界へと向かう詩人の意識の流れが存在しているのではないだろうか。恋愛詩の中でダンは、死の観念を通して多くの宗教

的言及を非常に目立たない形で作品に織り込んでいることを認めることができる。この様な死への言及は、作品の存在を左右するようなテーマと密接に結びつきながらその根本的存在意義を常に示唆し続けているのである。

“The Canonization”における人生の幸福の享受を敢えて放棄し、拒み難い恋に身を投じる恋人達は外見的には恋の殉教者としての印象が強く映る。しかし、他方第三連から最終連に至るまでの表現は語り手の宗教への積極的傾倒を露呈する結果となっているのである。

Call us what you will, wee are made such by love;
 Call her one, mee another flye,
 We're Tapers too, and at our owne cost die,
 And wee in us finde the'Eagle and the Dove.
 The Phoenix riddle hath more wit
 By us, we two being one, are it.
 So to one neutrall thing both sexes fit,
 Wee dye and rise the same, and prove
 Mysterious by this love.⁶

我々は、恋ゆえに情火に飛び込んで身を焼き滅ぼす蛾となり又自己の生命を燃焼しながら滅びてゆく蠟燭であると謳うこのイメージリ効果は、激しいセクシアリティを意味すると同時に語り手の愛の熱情的感情の高揚を誘発している。そして語り手は、死は性的愛の極致の体験を意味するという当時のルネッサンス期における認識のもとに積極的に死の世界へと没入していくのである。“Wee dye and rise the same, and prove/Mysterious by this love.”二人の恋人は結合して一つのものとなることによって愛から死へのプロセスを辿ることになる。二人の死から蘇るものは、雄々しい男性の精髓である鷲と女性の優しさの象徴である鳩でありさらに二人の完全な愛による結びつきは、性の相違を超越する高尚な境地に到達し、最終的には両性具有の世界に唯一羽しかない不死鳥となって羽ばたいて行くのである。⁷ 恋人達の焼滅した肉体から魂が昇り死後も死を越えて永遠に愛は続くというこの男女の愛の状

況は、宗教的コンテキストの中で解釈することが可能である。換言すれば、死から復活、そして永遠の生命へと続くこの死生観は聖書における「ヨハネによる福音書」第5章24節に由来しているものとして説明することができる。

I'm telling you the truth: whoever hears my words and believes
in him who sent me has eternal life. He will not be judged, but
has already passed from death to life.⁸

性愛を謳う表現の中に織り込まれた死生の図式は、「永遠の生命を得て死から命へと移っていく」という聖書の原則との見事な一致を認めることができる。しかし、批評家の中にはこの詩の愛の賛歌としての意味を重視するあまり宗教的テーマの存在を軽視する傾向が認められるが、宗教的テーマは恋愛という皮相的題材を超越した所に、つまり性愛を宗教的観念によって昇華しようとする語り手の思考の中に存在していると言ってよい。ここで語り手が謳っている純粋に愛しあう二人の男女が死後に一体化して蘇り永遠のものになっていくという愛の業にはキリスト教の奇跡が投影されているのである。語り手の思考の中には宗教的救いを渴望しながら深い祈りを捧げている詩人自身の姿が息づいているのである。キリスト教的価値観、人生観は、明らかに彼の詩作過程の中に微妙な形で影響を落としていると言えよう。この様な彼の内面的状態と並列して、この詩の制作の背景には当時の宗教界に対する詩人の個人的な立場が深い奥行きをもって存在していることが指摘されている。⁹つまり、当時の宗教状況に関する数多くの言及が詩の表現の中には隠されていることを認めることができるのである。ローマ教会が新しく制度化した悪魔の弁護人（Advocatus Diaboli）は、イグナチウス・ロヨラの列聖の問題と絡み合い制度の伝統を死守する権威主義と一般大衆の自然発生的激情的信仰との間に一層の確執を生む結果になったのであった。この詩の第一連における反社会的姿勢を強く示す語り手は、詩人の一般大衆の反権威主義的態度への深い共感を反映していると見做すことが可能であり、又第三連の終り“.... all shall approve/Us canoniz'd for Love:”の表現にみられる列聖加入を承

認する一般大衆（“all”）には、当時の列聖を強く要求した民衆の姿の投影を認めることができるのである。当時の宗教界から及ぼされる波紋も詩人の宗教観に持続的な強い影響を与えていたと言えよう。彼は詩作の中にそのような外界から状況を巧妙に応用している。この意味において、恋愛詩は自己の外的刺激への反応を詩的ドラマとして展開し比喩的または暗示的に人間の行為の形をとってコメントする機能を有している特質を保持していることが分かる。

第四連においては、語り手の愛の永遠性への希求は強まってゆくことが窺われる。

Wee can dye by it, if not live by love,
 And if unfit for tombs and hearse
 Our legend bee, it will be fit for verse;
 And if not peece of Chronicle wee prove,
 We'll build in sonnets pretty roomes;
 As well a well wrought urne becomes
 The greatest ashes, as halfe-acre tombes,
 And by these hymnes, all shall approve
 Us Canoniz'd for Love:¹⁰

死後の世界に愛の永遠性を求めた語り手は、己の恋の不滅の物語が冷徹静止的イメージを伴う俗界の終焉の場とされる墓碑や棺に刻まれることも、又年代記という単なる俗界の記録にとどまることも相応しくないと訴える。彼は、自らの「高貴な死灰」の場をソネットの短い十四行の詩の中の美しい聖なる部屋に求めるのである。そして最終的にこの純粋な恋の物語によって天に召され聖者として永遠に生きることを願うのである。即ち、この語り手の思考の中には、純粋に愛しあった恋人同志だけがその純愛ゆえに死後宗教的聖域に到達することができますようにと願う詩人の宗教的憧憬の強い思いが流れているのである。

最終連では語り手は、愛の理想郷の名のもとに宗教的世界を体現している。

And thus invoke us; You whom reverend love
Made one anothers hermitage;
You, to whom love was peace, that now is rage;
Who did the whole worlds soule contracts, and drove
Into the glasses of your eyes
So made such mirrors, and such spies,
That they did all to you epitomize,
Countries, Townes, Courts: Beg from above
A pattern of your love!¹¹

現世の人々は、天上において恋の聖者となった我等に対して恋の信仰の手本を授かろうと祈禱を捧げる。この祈りの言葉、「神聖な愛によって自分以外の一切のものを放棄して互いのうちに平和な安住の地を見出した御身等よ、」の根底にはキリスト教信仰における神の国を彷彿とさせるものが存在していると言えよう。即ち、その祈りにおける締観的姿勢には神の国に入るには、地上における一切のものを放棄しなければならないとする聖書「ルカによる福音書」12章20－21節による影響の存在を否定することはできない。つまり、恋愛の極致体験を勝ち得るためには死をも厭わない、語り手の真摯な態度には、唯一の価値あるもの（聖なるもの）に対して地上における全てのものを捨て去るというキリスト教の思想精神が反映されているとみることが出来る。詩人は、語り手というペルソナを擁することによって恋愛の形式を踏まえながらも、己の心における宗教的至福への希求の念を描き出しているのである。要するに“*The Canonization*”は、純粋な恋愛のパターンを宗教的救いに結びつけて、つまり愛し合う恋人達の像を愛の聖者の姿として映し出しながら、詩人自身の宗教的願望を謳った作品と言えよう。

II

“*The Anniversarie*”では、その様な詩人の宗教的精神の実体が一層明瞭な形をともなって表出されていることが分かる。第一連においては、まず

現世における輝かしい地位を占めているすべてのものは、自然の法則に従い日々老い死の破滅へと向かっていくのであるが、私達の愛だけは衰退すること無くいつまでも最初の最後の永遠の日を保持しているのだという愛の賛歌を情熱豊かに謳う語り手の姿が印象的に呈示されている。しかし、彼のこのような姿のうちにも肉体的死が終焉ではなく、復活の日の希望を精神の拠り所とした詩人の深いキリスト教的死生観に基づく心理が内包されていることが分かる。それは、換言すれば二人の恋人の愛の賛歌、即ち spiritual love の永劫不滅を恋愛詩の形式の中で謳いながらも、衷心においては宗教への強い関心を示す詩人の意識を物語っているのである。

Two graves must hide thine and my coarse,
 If one might, death were no divorce
 Alas, as well as other Princes, wee,
 (Who Prince enough in one another bee,)
 Must leave at last in death, these eyes, and eares,
 Oft fed with true oathes, and with sweet salt teares;
 But soules where nothing dwells but love
 (All other thoughts being inmates) then shall prove
 This, or a love increased there above,
 When bodies to their graves, soules from their graves re-
 move.¹²

第二連の冒頭では、死の到来に際して思い悩む語り手の心情が謳われている。愛の永劫不滅を願望する語り手も、肉体的死は免れることができないという悲壮感を抱く。しかしその様な彼の嘆きは、愛が支配する魂は死の瞬間に肉体から抜け出し昇天し、そして天界で永遠の生命を得て一層高まっているのであるという死後の世界を確証する姿勢へと移行していくのである。この心象風景は、深遠なる詩人の宗教性のもとに詩的論理によって巧みに構成されていることが分かる。つまり詩人はこのプロットの背景に、聖書「コリント人への第1の手紙」15章42-43節への強い連鎖反応を働かせてい

るのである。

This is how it will be when the dead are raised to life. When the body is buried, it is mortal; when raised, it will be immortal. When buried, it is ugly and weak; when raised, it will be beautiful and strong.¹³

死者の復活に際して、蒔かれる時は朽ちるものでも朽ちないものに、卑しいものでも輝かしいものに、弱いものでも力強いものに復活していくと記すパウロの言葉は、恋人の死後の永遠性を勝ち得た魂が強大なものに再生されていくと唱える詩人の死生観に深い影を射していると言えよう。その様な宗教的精神に根差した彼の死の観念は、決していかなる状況においても悲痛な印象を残すものとしては捉えられてはいない。彼の思考は常に宗教的思想へと向かっていき、それを詩の置かれている状況に精密にあてはめているのである。彼の死生観は、*Of the Progresse of the Soule* (1612) の中において具体的な形で記されている。そこには、現世では魂は肉体という殻に縛られている状態であるが、死によって初めて肉体の殻より抜け出して広がりとして自由を手に入れ瞬く速さで天地を駆け抜けけるという、来世における魂の高揚が表現されている¹⁴ ことを認めることができる。それは、即ち魂は現世においては不便な境遇を強いられており、来世（天）においては束縛を取り去った解放感に浸ることができるという詩人の来世への憧憬の姿勢の表明であると言ってよい。彼にとって死後の世界とは、恐怖や絶望的感情を触発するものではなく、寧ろその彼方に確かな救いを認めることができる祝福を意味していると言えよう。

最終連における語り手の冒頭の言葉の中でこのことが立証されていることが分かる。“And then wee shall be throughly blest,/But wee no more, then all the rest;”¹⁵ そして最終的には、死後の救いの信念のもとに、(恋人の) 互いの心に潜む裏切り(心がわり)への不安を退けて愛を重ねながら現世を王者らしく生きていこうという語り手の確固たる決意でこの詩は終わっている。この語り手の自信に満ちた調子は、必然的に人類に神との交わりを

説き死後の確かな救いを示した聖書におけるイエスの使命「ヨハネによる福音書」14章3節の教義に帰結するものであると言えよう。詩人は恋愛詩の中で恋人達の愛の唄を延々と展開することによって、宗教的境地の高みへと向かう己の意識の様相を描出しているのである。つまりこれらの詩の中で彼は、恋愛という事物を宗教に重ね合わせて昇華していくことによって最終的には深いキリスト教的意味をもった作品を書いていたのである。恋愛詩における宗教観を反映した宗教思想、聖書を踏まえた表現は、主題である恋愛を媒介としてその深奥な象徴的意義を鮮明に映し出すという効果を生んでいるのである。

このような夥しい死の描出に込められた詩人の宗教精神の脈絡を追う結果、彼は日常的レベルにおいて死というものをどの様に昇華していたのであろうかという疑問が沸き起こってくる。1608年9月に Sir. Henry Goodyer に宛てた書簡は、彼の死への意識を洞察する一つの手懸りを示唆させるものがある。

With the first these I often suspected my self to be overtaken; which is, with a desire of the next life: which though I know it is not merely out of a weariness of this, because I had the same desires when I went with the tyde, and enjoyed fairer hopes than now: yet I doubt worldly encombrances have encreased it. I would not that death should take me asleep. I would not have him meerly seise me, and onely declare me to be dead, but win me, and overcome me.¹⁶

文面には、彼の死を望み願う心情が滔々と述べられていることが分かる。この時期における彼の個人的状況は、窮地の境遇にあったと言ってよい。アン・モアとの秘密結婚による失職、社会からの追放、貧窮、度重なる妻や子そして自分の病気がその具体的要因である。“.....yet I doubt worldly encombrances have encreased it”に記された彼の死への願望は、その様な世の煩わしさという外的刺激によって与えられたものであることを認識しながらも、

他方では今よりずっと輝かしい希望を抱いていた時にも死の願いが内在していた（“I had the same desires when I went with the tyde, and enjoyed fairer hopes than now:”）という己が常に死を意識していた事実を告白している。つまり、恋愛詩で記されている多数の死への言及は彼の一時的な精神の衝動に起因するものではなく、寧ろ常に存続していた死の観念の根底に流れる宗教への強い思いより表出したものだと解釈できる。ダンのキャリアにおいて死の観念は、自己の内的心理プロセスに外界からの刺激が絡み合っている一つの宗教的コアを生み出しているのである。この意味において、死は彼の創作姿勢に強いエネルギーを与えていると言える。そしてその詩作衝動のエネルギーは死の表現の中に込められた宗教的感情の振幅によって生み出されていたと言えよう。

この手紙と同年に執筆された *Biathanatos* の中では、宗教的真理に立脚した死の意識が克明に語られている。この書は自殺におけるキリスト教教義に対して異端とされる見解を含んでいることによって彼の生存中には、出版には至っていない禁断の書であるが、当時の彼の死の観念を把握する上で重要な要素を含んでいると言えよう。彼は自殺を野蛮な歪められた行為として解釈することを否定し、普遍的人間の欲望の証しであるという論を展開しているのである。そして彼は、キリスト教教義は自殺を禁止し罪として認定しているが、人間の死への自然的欲望は決して阻止することは不可能であると訴える。彼は、当時のキリスト教界にみられた殉教は、死への欲望を単なる変換した形にすぎないと主張する。つまり、自殺という一種の死の表現に対して自己の赤裸々な心情を綴っているのである。しかし、彼は当時の宗教界における詳細な教義への反論を展開する一方、キリスト教を例証しながら自己の死における理想的ヴィジョンを記している。

This actuall emission of his soule, which is death, and which was his own act, and before his naturall time,.....we find thus celebrated, That that is a brave death, which is accepted unconstrained; and that is an Heroique Act of Fortitude, if a man when an urgent occasion is presented, expose

himselfe to a certaine and assured death, as he did.¹⁷

彼は、死は英雄的に実践される崇高な精神に基づく行為であると主張する。そして本当の魂の出発（“This actuall emission of his soule”）とはキリストが人類の罪を救うために自発的に己の魂を昇天させた行為と見做し、それに対して勇敢なる死、即ち不屈の英雄的行為としての称賛を惜しまない。彼はキリストの語った言葉を引用する。“...No man can take away my soule and I have power to lay it down”¹⁸ 彼の根底には、明らかに死を誰からも強制されることのない自発的に受け入れるものであるということを実践したキリストの死への強い共鳴感が流れているのである。即ち、ダンの死に対する認識はキリスト教に基づくこのような宗教的信念に深く根差したものであると解釈できる。ダンの精神の中枢における宗教的信仰はこの時期、つまり青年時代において既に完成されていたものであり、それが恋愛詩において彼の思考の基本姿勢となって現れているのである。その姿勢は恋愛詩の中で恋人達の愛、さらには魂の永遠性を願う彼の宗教的救いの念に通じているのである。

ダンの恋愛詩を一種の宗教的テーゼとして捉えるならば、例えば“Communitie”などの明らかに官能的、冷笑的色彩の濃い作品はどの様に解釈したらよいのであろうか。T. S エリオットは、ダンの恋愛詩に現れたエロチックな要素を誇張して考察すべきではないと主張している。¹⁹ “Communitie”にみられる女性に対する毒舌的な冷笑を孕んだ思想は、古代懷疑主義や享楽主義において使い古された陳腐なテーマであり、類似の思想を謳った唄は諸外国においても多数見受けられている。²⁰ つまり、それは大陸文学に造詣の深かったダンが、それを単に応用して謳ったものにすぎないと言えよう。即ち、この種の詩では彼の真意から真剣に己の信念を謳ったのではなく、在来のテーマに彼独自の形而上的表現を加味しながら創作されたもののだとして説明することができる。“Communitie”などの詩は、ダンのいわば精神的余裕の産物であり、そこにみられるあそびの要素はある意味で彼の恋愛詩を奥行きのある深い力づよいものと成しているのである。

ダンの恋愛詩は、恋愛を信仰に結びつけて描くという彼の新しい試みの一

つの実践であったと言えよう。この場合におけるダンの基本的姿勢は恋愛というテーマよりも寧ろ、宗教的言及を含有する死の描出によって己の宗教的コアを表明することにあつたのである。恋愛というテーマは、そのロマンチックな性質ゆえに常に彼の気の休まる避難所の役割を担ってきたものと言える。恋愛と宗教という二極の Capacity を有していたダンは、宗教的トーンをもつ恋愛詩において、愛の極地におけるぞくぞくするほどの宗教的法悦を恋愛というその世俗的要素ゆえに一層強く喚起させることができたのである。しかし、恋愛詩におけるこの様な宗教的イメージは彼独自の精緻な表現と恋愛詩というその象徴的枠組みの為に制約されざるを得ない結果が生じているのである。だが、恋愛詩にみられるこの宗教的心理テーマには、後年の宗教詩へと向かう新たな詩作態度を予期させるものが明らかに存在しているのである。

註

- 1 J.B. Leishman, *The Monarch of Wit* (London: Hutchinson's U.L, 1965), pp.38-39.
- 2 Mary Clive, *Jack and Doctor* (London: Macmillan, 1966), p.101.
- 3 A.J.Smith(ed.), *The Complete English Poems* (1971; rpt, Penguin Books Ltd., 1986), p.163.
- 4 Neil Rhodes(ed.), *John Donne: Selected Prose* (Penguin Books Ltd., 1987), p.61.
- 5 Cf. John Carey, *John Donne: Life, Mind and Art* (1981; rpt. London: Faber and Faber, 1990), p.187.
- 6 H.J.C. Grierson(ed.), *Donne: Poetical Works* (1929; rpt. Oxford U.P., 1984). p.14. *Songs and Sonnets* の引用は以下全てこの版による。
- 7 岡田宏子、「ソングズ・アンド・ソネッツにおける部屋の詩学」、「ジョン・ダンとその周辺」、東京、金星堂、1985年、p.47.
- 8 New Testament, John: ch.5, v.24.
- 9 Cf. 川崎寿彦、『ダンの世界』、東京、研究社、1967年、p.60.
- 10 Grierson, pp.14-15.
- 11 Ibid., p.15.

- 1 2 Ibid., p.23.
- 1 3 NT, 1 Corinthians: ch.15, v.42-43.
- 1 4 Grierson, p.232.
- 1 5 Ibid., p.23.
- 1 6 T. Healthy & H. Gardner (ed.), *John Donne: Selected Prose*, chosen by Evelyn Sympton (Oxford U.P., 1967), p.129
- 1 7 Rhodes, p.81.
- 1 8 Ibid., p.81.
- 1 9 T.S. Eliot, “Donne in Our Time” in *A Garland for John Donne*, ed., T. Spencer (1931; rpt. Mass: Peter Smith, 1958), p.10.
- 2 0 P. Legouis, *Donne the Craftsman* (1928; rpt. New York; Russell & Russell Inc., 1962), p.38.